

アメリカ軍捕虜と残留日本兵 —太平洋戦争の「記憶」形成の視点から—

マーク・パリロ

太平洋戦争が勃発した原因の1つは、文化的な誤解であり、さらに、日本政府および米国政府が共通の見地に立たなかったこと、そしてどちらの国民もお互いの価値観と世界観 (*Weltanschauung*) を理解し合わなかったことも原因の一部であった。同様に、人類史上最大の戦域で展開されたこの戦闘に参加した水兵も、歩兵も、航空兵も、そして海兵隊員も、争い合う民族国家の一員としてばかりでなく争い合う文化の一員としても戦ったのである。したがって私達は、2つの民族がそのような戦争の終結から長い年月を経るにつれて、過去の出来事について異なった認識を持つようになったことに驚いてはられない。

戦時中に捕虜となり、天皇のサムライの支配下で長年生活させられた米兵ほど、日本人の性格や文化についての適切な見識を持った米国人はいない。太平洋戦争では、合わせて約13万人に上る米兵が日本の捕虜となった¹。日本に捕らえられた米軍捕虜の10%以上が収容先で死亡したが、この数字は、第二次大戦中にドイツ軍の捕虜となった米兵の死亡率4%をはるかに上回る²。このようなより高い死亡率が示唆するところは、日本の米軍捕虜が強いられた状況がいかに苛酷であったかということであり、それは、単に不潔なだけのところからまさしくおぞましいところまで千差万別であった。

日本の米国人捕虜が悲惨な体験をするはめになった理由はいくつかあるが、結局は、日本の軍人の文化的伝統と、東アジアおよびオセアニアにおける戦争による経済的混乱の2つの項目に帰結する。日本の兵士は、何世紀にもわたって、武士道すなわち「武将の心得」を説いた行動規範を拠り所にして生きてきた。サムライは、頑固なまでの忠誠心、高潔な意志、(自分自身の物質的な充足も含めた)物質に対する無頓着さ、そして社会における自身の役割と立場に対する強い自覚などの内面的な美德や特質をみずから培った。ある程度までは、中世ヨーロッパの騎士についても同じことが言えるかもしれないが、しかし、サムライは、(議論的になることがせいぜいだった)自身の価値観に対するこだわりの程度だけでなく、個人よりむしろ社会集団の福祉に焦点をあてる儒

¹ 第二次世界大戦の太平洋戦区の捕虜のような複雑で広範囲な現象については当然ながら、決定的な数字は一切存在しない。情報源について最も周到かつ包括的に研究した書籍は、Van Waterford, *Prisoners of the Japanese in World War II: Statistical History, Personal Narratives and Memorials Concerning POWs in Camps and on Hellships, Civilian Internees, Asian Slave Laborers and Others Captured in the Pacific Theater* (Jefferson, N.C., and London: McFarland & Co., Inc., 1994), pp. 141-46である。E. Bartlett Kerr, *Surrender and Survival: The Experience of American POWs in the Pacific, 1941-1945* (New York: W. Morrow, 1985) も参照のこと。

² Waterford, p. 145.

教的な考え方の点でも、西洋の騎士とは異なっていた。集団が繁栄する基盤であった社会的階級制度を強制する場合、暴力は許容できるだけではなく好都合なものでもあったため、サムライは、上位の身分の者達からの身体的な虐待をきわめて容易に受け入れ、そしてきわめて容易に下位の身分層に暴力を行使した。収容所の衛兵は、どんなに階級が低かろうとも、みすばらしい捕虜より上の階級であった。そのような状況の下では、体罰は避けられなかった。

しかし「武士道」は単に社会的階級制度について説くばかりのものではなかった。西洋人は、人間的に成熟するための対価として、時折の個人の失敗は許容した。戦場で失敗した場合西洋人は、敵には慈悲を、友人には身代金を、そして神には許しを請うた。これとは対照的に日本の武士道では、戦場での失敗は、あらゆる物の中で最も尊い浄化物質、すなわち血をもってしか贖えなかった。したがって、自己犠牲で贖うなら戦場での失敗は許されたかもしれないが、武士道に背くことは絶対に許されなかった。戦場での失敗を自分自身で浄化しなかった武士は、卑怯な戦士であった。それどころか、そのような戦士は人間としても失格であった。撲たれ、殴られ、そして蹴られても当然であった。殴って来る人物は、社会階層上の上位者であるばかりでなく、人間の徳において彼より優っていた。軍人としても人間としても出来損ないの卑しい身分の捕虜は、自分のどこが誤っていたのかを知るために体罰を甘んじて受け、自分の自堕落な生き方を慎ませてくれた社会組織に奉仕することによって、一部分だけでも改めなければならない。

経済の状況は、日本軍の捕虜全員にとって、ますます事態を悪化させた。戦前この地域は、経済的に自給自足を達成しておらず、いくつかの必需品、特に食糧は輸入に頼っていた。唯一インドネシアとビルマだけが、国内需要を賄うだけの米を生産した。日本の本土ほど食糧不足が明らかであったところはなかった。日本は、長年にわたり主要穀物の一大輸入国だった。真珠湾攻撃から6カ月で日本が進攻し、東アジアと西太平洋の諸国が通常の貿易相手国との交易ができなくなった際に、多くの品物が特に不足した。当然ながら日本軍は、自ら使うために現地の資源を要求し、大量の食糧が本土に向けて輸送された。たとえば満州の食糧品の60%が日本に送られたと推定され、また、沖縄は、島内で消費される米の三分の二が輸入された³。大日本帝国の食物資源が当初は拡張したにも関わらず、本土の食糧不足は長年深刻であった。支那事変が勃発してからわずか2年後の1939年までに飲食物の価格は35%高騰した⁴。

³ 出典は Captured Personnel and Material Branch, Military Intelligence Division, U.S. War Department, 507-200, pp. 7 and 12, Office of Naval Intelligence Monograph Files: Japan, 1939-46, Record Group 38, U.S. National Archives である。

⁴ Donald W. Lamm, Assistant Trade Commissioner, Tokyo, Economic and Trade Notes No. 169, January 26, 1940, Records Relating to Commercial Attaches' Reports: Japan, 1940-1941, Record Group 151, U.S. National Archives.

本国国内がそれほどの欠乏状態に直面していたのであるから、日本の占領下の地域の人々がさらに困窮した中で暮らしを立てていたのは驚くべきことではない。敵の行為によって問題が悪化したことも何度かあった。たとえば、悪名高い「死の鉄道」（泰緬鉄道）を使ってビルマに運び込もうとした軍需物資の70%が途中で失われた⁵。前線に近い地域では、地元民はしばしば、食糧を確保するに当たって日本陸軍の輸送力をあてにしなければならないことがあった。そのような状況が大きな苦難をもたらしたが、特に日本軍自らが極度の欠乏状態で戦うときは顕著であった⁶。捕虜は日本の社会階層の最下層に属し、十分な食糧が与えられず、有効な治療を受けられない状態が日常的に続いた。

日本の軍人の価値規範と混乱した地域経済がもたらした結末が、戦争捕虜の惨状であった。典型的な捕虜の食事は、カロリーが全体的に不十分であっただけではなく、たいていはバランスが取れていないもので、ほとんどの場合、タンパク質とある種のビタミンが不足していた。捕虜は、自分の身体がやせ衰え、脚気などの栄養不良に関連する病気にかかっていることを自覚しながら、毎日苛酷な生存競争に立ち向かっていた。熱帯では、小さい傷が「熱帯の皮膚病」、つまり、ゆっくりと組織を腐らせてやがては骨にまで至る、人食いバクテリア感染症に発展してしまうほど相対的な健康状態は劣悪であった。多くの場合、捕虜は過労にも陥っていて、そのために健康状態をさらに悪化させ、一層病気にかかりやすくなった。中でも最悪な体験は、貨車あるいは船倉に大勢で詰め込まれたまま、1つの収容所から別な収容所に移送されることであった。熱帯地方の鉄道を走る金属製の有蓋貨車の中で焼けるような暑さに苛まされたり、想像を絶する「地獄船」の恐怖に耐え、極度の高温や、水、食糧、衛生施設、および医療の欠乏によって、正気を失う捕虜が続出した。「地獄船」での移送は、平均10日間かかったが、移送中の死亡率は17%であった⁷。

米軍捕虜が体験した辛酸が、他国の捕虜の場合とほとんど同じ程度かもしくは多少はましだったりしたことを指摘することは、恐らく有意義であろう。太平洋戦争における捕虜の平均死亡率は14%であり、戦域によってはこの2倍に達した。悲惨さを表す指

⁵ Intendance Department, Supply Plan for Burma, n.d., 64a(6), Section 2, U.S. Strategic Bombing Survey, Record Group 243, U.S. National Archives.

⁶ 当時のビルマの状況を見れば、日本軍の兵站組織が直面した問題がわかる。Intendance Department, Supply Plan for Burma, n.d., 64a(6), Section 2, U.S. Strategic Bombing Survey, Record Group 243, U.S. National Archives. を参照。食糧不足があまりにも深刻ないくつかの戦場では、日本軍はついこ人肉にまで手を出した。Military Analysis Division, U.S. Strategic Bombing Survey, "The Effect of Air Action on Japanese Ground Army Logistics," 22 March 1946, pp. 22-23, 1c(13)(a), Section 2, U.S. Strategic Bombing Survey, Record Group 243, U.S. National Archives.

⁷ これらの数値は不完全ではあるが、利用可能なかぎり最良のものである。Gregory F. Michno, *Death on the Hellships: Prisoners at War in the Pacific War* (Annapolis, Md.: Naval Institute Press, 2001), pp. 309-17 を参照。これらの数値はすべての国籍の戦争捕虜に関連する。劣悪な条件および暴行に加えて、連合軍の攻撃による死者数である。

標などはまったくないが、第二次世界大戦中に日本軍の捕虜となった兵士一般の体験と比べて米軍捕虜が大きく異なる扱いを受けたことは概してなかったと言うだけに留めておく。

以上が、太平洋戦争で米軍捕虜の体験した現実であった。フィリピンにおける活発な諜報・レジスタンス運動もその伝達手段になったが、様々な手段によって、日本における捕虜の処遇が極悪非道であるという報道が米国にもたらされた。「バター」は、「真珠湾」と同じようにして、太平洋戦争における米国の愛国心を高揚させるスローガンとなった。どちらも地名であったが、ある1つの出来事、特に、戦時下の敵への憎悪を募らせる出来事を米国人に想起させる合言葉となった。どちらの言葉も、公式な場面でも、非公式な場面（たとえばハリウッドの映画産業）でも、聴衆に感情的な反応を引き起こさせるために、米国の宣伝活動に利用された。フィリピンにおける米軍捕虜に対する虐待を扱った1943年のドキュメンタリー映画は『バター』という単純なタイトルであったが、これはまさに、戦中にこの言葉がどれほど米国人の心理を揺さぶったかを示す明白な指標そのものである。1945年にはRKOラジオピクチャーズが、ジョン・ウエインとアンソニー・クインをキャストに据えた映画『バターを奪回せよ (Back to Bataan)』を封切った。この映画は、戦時中日本の占領下にあったフィリピンでのレジスタンス運動を扱ったものであったが、プロデューサーは映画のタイトルに「バター」を用いることで観客の感情に訴えることに何のためらいもなかった。

しかし米国の大衆は総じて、米軍捕虜のおぞましい体験を裏付ける証拠を直接目にすることはなかった。捕虜の身体的状態または捕虜収容所の一般的な状況を実際に目撃したのは、捕虜自身および彼らを解放した米軍部隊、並びに、日本が降伏してから現地に到着した医療関係者を除けば、ほんのわずかしかなかった。本国に帰国した米国の民間人が、抑留者に対する虐待や蛮行を語ることは時々あったが⁸、戦争の後半にフィリピンで数人の捕虜が解放されるまでは、収容所生活の目撃証言はほとんどなかった⁹。一般の米国人が実際に日本軍に捕らえられていた米軍兵士と接触できたのは、戦争が終わって自由になった元捕虜に会った場合だけであった。

捕虜が栄養不良のために様々な疾患を患い、極度に衰弱することもしばしばあったが、これほどの複雑かつ広範囲に及んだ戦争が終結しても、最優先項目であった捕虜の帰国はすぐに実現しなかった。解放された捕虜達は現地で治療を受け、可能な限り早期

⁸たとえばJ. B. Powell, "I Was a Prisoner of the Japanese," *The Nation* (October 1942) を参照のこと。パウエルは、中国に抑留されている間に、栄養不良から感染症に罹り、両下肢を切断した。彼の記録は、捕虜仲間が受けた身体的な虐待に関連するものであったが、犠牲者の大部分は、泥酔その他の職務怠慢のために服役している一般中国人か日本兵であったと言う。

⁹活字になった記事の中には、マニラ近郊のニコルズ農場で働いた捕虜の生活について綴ったクラーク・リーの新聞連載記事 (*Kansas City Star*, February 26-March 1, 1945)、並びに、Ira Wolfert, "Japanese Hell Ship," *Reader's Digest* (April 1945), pp. 57-61 などがある。

に送還されたが、帰国の手段はほとんどの場合が船で、米国までは数週間を要したからである。戦時中に極度の慢性的な餓えを体験した帰還捕虜は、帰国後、ずっと食べ続けた。20 キロ以上体重が落ち、捕らえられた際には決して太りすぎではなかった兵士であったが、たちまち元の体重に戻った。しかし、苛酷な捕虜生活のために健康状態が年相応の基準よりはるかに低かった。そこに突然豊富に摂取された高カロリーは脂肪として蓄積され、元捕虜達はぶくぶくと太り、見てくれがひどく非健康的で悪くなってしまった。これが、平均的な米国人が国内で遭遇した元捕虜の姿であった。こうした元捕虜の不健康な容姿はなんとなく奇異に思われることもよくあったが、それが苛酷な捕虜生活の実態を伝えるには至らなかった。

さらに世界中の至る所が戦争によって荒廃し、人々が困窮している状況であったので、日本軍の米国人捕虜に対する虐待は、あまり衝撃的には見えなかった。東京、マニラ、そしてシンガポールで行われた戦争犯罪裁判により、残虐行為についてさらに多くの情報が伝えられたが、新聞記者の文章もニュース映画の短い映像も、日本軍による戦時中の捕虜収容行為が引き起こした人間的な悲劇——個人的な視点からの悲劇と全体としての大きな悲劇を含む——については、米国の公衆に伝えることはできなかった。ヘッドフォンを付けて審判を受ける戦争犯罪者が証言している様子がスクリーンに映ったが、その証言が戦犯達の極悪非道さをどれほど暴こうとも、解放されたナチスの強制収容所と絶滅収容所を扱ったニュース映画の方が映像的によりインパクトが強く、より多くの視聴者の共感を得た。平均的なアメリカ人が持っていた程度の日本軍による捕虜虐待に関する知識でも、この間まで戦った敵の非人道的な本質に関する一般的な人種的ステレオタイプを十分裏付けるものであった。それは、ホロコーストの恐怖の全容を理解したときほどの真実味も衝撃も伴わず、太平洋戦争中に行われた他の残虐行為の陰に隠れて、忘れ去られがちであった。

だが、この状況は 1957 年にホライゾンピクチャーズが映画『戦場に架ける橋 (Bridge on the River Kwai)』を公開したのをきっかけに変わり始めた。この映画には、ビルマの泰緬鉄道建設に駆り出された連合軍捕虜達が描かれているが、捕虜が苛酷な状況下の生活と労働を強いられていたことから、泰緬鉄道は「死の鉄道」という呼び名の方でよく知られている。映画に描かれている事件は、ピエール・ブールの小説を原作としたフィクションである。しかし、鉄道建設に伴う恐怖は真実であり、恐怖という意味で充分であった。ブール自身が、戦時中には日本軍に占領された仏領インドネシアで捕虜として抑留されていたため、1950 年代にあっては画期的であったある程度のリアリズムが映画に持ち込まれた。いかなるハリウッド映画も、「死の鉄道」に関わった捕虜収容所で起こった悲劇のすべてを描くことはできなかったが、撮影技術、キャスティング、そして『戦場に架ける橋』のロケーションが、第二次世界大戦の太平洋戦域

で捕らわれた連合軍捕虜の苦難を視聴者の心に強烈に印象づけた。上官に命じられた期限までに鉄橋を建設しなければならないという、強迫観念めいた使命感から、病気であろうと衰弱していようと、捕虜を一人残らず労役に駆り出す収容所所長の無慈悲さと傲慢さ、そして、少なくとも西洋の基準から見た場合の倫理的配慮がまったく欠落している有様に、視聴者は驚かされた。

実際には、この「死の鉄道」建設に従事した米軍捕虜はほんのわずかであった。この建設現場で働かされた捕虜は約3万人で、苦難の中でその40%が死んでいった。大部分は、1942年2月のシンガポール陥落により捕虜となった英軍とオーストラリア軍兵士達であった。しかし映画『戦場に架ける橋』の主役の一人は米国人捕虜である。しかも、映画に登場する捕虜が体験した虐待は、日本軍に捕らえられた捕虜全員の体験の典型であると米国の観客は思っていた。この映画は、最優秀作品賞など7部門でアカデミー賞を受賞し、商業的に大成功を収めた。米国の観客にとっては、不潔で餓えが蔓延する「死の鉄道」労働収容所、その日本人所長、そしてその橋そのものが、捕虜体験を象徴する存在となった。1958年にパラマウントが封切った奇抜なコメディ『底抜け慰問屋行ったり来たり (The Geisha Boy)』では、朝鮮戦争に出兵した米軍兵士の慰問団の一員である芸人が日本に来て、伝統的な日本家屋に住む恋人を訪ねた。そこには彼女の父親しかいなかったのだが、この父親は、捕虜を使って庭の池におなじみのトラス橋を造っていた。この父親を演じたのは、『戦場に架ける橋』で収容所所長を演じた早川雪州である。

捕虜が体験したことに対する米国人の見方は、太平洋戦争と米国が戦った敵軍全体に対する考え方と一致した。米国人は、太平洋戦争に勝利したことを次のように理解した。「米国人兵士は、ウエーク島やフィリピンのように、兵士の数で圧倒され、兵站面の支援が得られなかったために捕虜となったが、日本の敵兵よりも優れた道徳観念を失わなかった。そして国家も、真珠湾を攻撃した日本の卑劣さに圧倒され、その後の困難に対する準備が整っていなかった。収容所の衛兵は野蛮で、想像力に乏しく、尊大で、人命を軽んじたが、これはとりもなおさず日本人の国民性そのものだ。米国人捕虜は、敵の破廉恥な裏切り行為のために捕らえられたが、聖戦を戦っているのだ、という信念が支えとなって耐えに耐え、自らを捕虜にした者を克服することができたのだ。」

冷戦時代に経験した現実が米国人の心理をほぐし、日本人の国民性は多少見直されるようになった。最初は敗戦国日本の占領者であり、その後は有益な同盟国の頼もしい友人になった米国の兵士達は、日本人と接触する機会が多かった。日本人と米軍兵士との交わりは、特に朝鮮戦争では顕著であった。多くの米国軍人は日本本土に駐屯し、または前線から離れている期間は日本で過ごした。日本人に対する姿勢の変化を反映したのが、マーロン・ブランド主演で1957年に封切られた映画『サヨナラ (Sayonara)』

で、これは米国空軍パイロットと日本人女性との恋物語である。この空軍パイロットは恋を選択し、約束されていた立身出世への道のみずから進んで捨てた。

しかし、米国人の記憶にある太平洋戦争そのものもまた、ある程度変化していった。早くも1968年に公開された『太平洋の地獄 (Hell in the Pacific)』は、第二次大戦中に敵対する2人の兵士が同時にある孤島で遭難するフィクションであった。2人は結局、生き延びるには協力し合わなければならないと悟るが、最も注目すべきは、この映画が、この2人の性格を同じように礼儀正しい男性として描き、自分では制御できない力によってそのような状況に陥れられたとしている点である。これとは対照的なメッセージが『Baby Blue Marine (「海兵隊基礎訓練落第者」)』(1976年、日本劇場未公開)で語られている。この映画では、戦時中の国内の人種主義的偏見が、現在でいう「政治的に正しい」行為であったということで問題外にされてしまう。英国で制作され、米国のテレビで繰り返し放映されたミニシリーズ『アリスのような町 (A Town Like Alice)』(1981年)では、日本人の描写がもう少し複雑になっている。特にサディスティックな敵罰主義の将校を含む衛兵のほとんどに恐怖と憎悪を募らせながら捕虜達は生きていたが、それでも衛兵のうち1人だけは、捕らえられた民間人女性達に対して愛想が良く、特段に優しく、共感を呼ぶ人物として描かれていた。1987年に封切られた独立系の映画『男たちの賭け (Captive Hearts)』も同じようなパターンで、この映画では、狂信的な本土防衛軍が、長老の陸軍退役軍人に導かれた、東北地方の農民の非協力的な策略に妨害され、落下傘で脱出した米国人の爆撃機パイロットを捕らえようとして失敗する。1998年にリメイクされた『シン・レッド・ライン (The Thin Red Line)』で再び、日本人の微妙な性格描写があった。ジェームズ・ジョーンズが1962年に発表した原作の小説の中では、敵は抽象概念で、何も描写されておらず、ほとんどが筋を組み立てるための道具であったのに対し、このテレンス・マリック監督版では、一部の日本兵は毅然としていて、他に猪突猛進型の勇士として描かれる兵もおり、さらに別の日本兵は心理的なストレスを訴えたり、臆病者として描かれている。つまり、日本兵は敵兵たる米国人と同じ人間で、差異点より、むしろ類似点の方が多いのである。

なぜ、米国人の太平洋戦争体験の記憶の中心が自国の軍人ではなく敵の日本人なのかと思う人がいるかもしれない。しかし実は、これらはあたかも同じ建物を別々な側面から見ているだけなのである。敵の輪郭を描くことで、その敵を倒した兵士と社会の定義づけができるようになった。敵を力ある存在と認識すれば、その敵を倒したことにより、自分の力と戦果が浮き彫りにされる。自分とは対照的で非倫理的な価値観を持っていると認識すれば、そもそもその敵と戦うことは正しかったと納得できる。戦争捕虜は、力と正義を備えた米国人の最も純粋な形であったことは、ほぼ間違いない。捕虜は敗者であった。つまり、最初は捕らわれたのである。それは確かであるが、最後には、

彼を捕らえた者の非道に耐え抜き、捕虜にならなかった友軍が敵を武力で制圧し、勝利したように、捕虜は道徳上の勝利を収めたのであった。

これらのすべてを考えると、第二次世界大戦は、疑いもない邪悪な脅威を相手として、正義のために戦った「善の戦争」として捉えることができる。第二次世界大戦の記憶をこのように形成することは、冷戦の恐怖と道義的な不明確さに悩まされている米国人にとっては価値あることであった。これは、冷戦後の不安定な時代、特に、2001年9月11日の同時多発テロ以降、米国人が、軍服を着ていない者達を敵とする、別な種類の邪悪な過激主義者との対決にしゃにむに突き進んだ時代にあっては、一層大切になった。

よって、戦争捕虜の体験は、敵である日本人について、そして太平洋戦争に従軍した米国人についての考えをまとめる際に重要であり続けた。米国人捕虜による回顧録でベストセラーになったものはほとんどなかったが¹⁰、それでも、1980年以降あまりにも多くの捕虜体験者が回顧録を出版したので、その数から見ても、ある程度以上の読者人口がいたことは間違いない。こうした本が主に強調したのは、大きな試練に直面しながら才知を働かせ、仲間意識を育み、生き抜くという、人間くさい興味を引く側面であった。捕虜を捕らえた日本人がどう描かれているかという点、相容れない存在ではあるが多様な側面を持つ敵というイメージをさらに鮮明にしたもので、残虐で傲慢ではあるが、嫌な奴であってもなおかつ人間として理解できるものとしてである。そうした元捕虜によるいくつかの回顧録が感動を呼び、その分、大衆が記憶を形成する際にそれらの影響を強く受けた¹¹。

欧米の映画ではあいかわらず、捕虜を捕らえた日本軍が注目され続けた。『戦場のメリークリスマス (Merry Christmas, Mr. Lawrence)』(1983年)、『太陽の帝国 (Empire of the Sun)』(1987年)、『パラダイス・ロード (Paradise Road)』(1997年)、そして『クワイ河収容所の奇蹟 (To End All Wars)』(2001年)では、ほぼ間違いなく、捕虜よりも日本軍の衛兵により強い関心を寄せていた。特に最後の『クワイ河収容所の奇蹟』は、アーネスト・ゴードンの実話に基づいているという点で興味深い。ゴードンは自らも含む捕虜を捕らえていた日本兵を許すことによって生き延び、その捕虜体験から牧師になった。これらの映画はすべて、抑留民間人も含めた英国人捕虜を扱った英国の作品であるが、どれも米国で広く上映されたことは注目に値する。1965年に制作され

¹⁰ 戦後 50 年のあいだに出版された戦争捕虜の記録に関する書籍の詳細な文献目録については、Gavan Daws, *Prisoners of the Japanese: POWs of World War II in the Pacific* (New York: William Morrow, 1994) を参照のこと。Daws の本では、あらゆる国籍の捕虜が扱われている。

¹¹ 元捕虜による私的な記録は多数あるが、この分野についての特に優れた解説が、Preston John Hubbard, *Apocalypse Undone: My Survival of Japanese Imprisonment during World War II* (Nashville, Tenn.: Vanderbilt University Press, 1990) である。

た映画『キング・ラット (King Rat)』¹²は英国人の捕虜体験映画であるが、実際は、米国人捕虜を扱った作品であると受け取られている。米国人の視聴者は、上述の英国人捕虜を描いた映画でも同じ受け止め方をしがちである。

先に論じたように、捕虜となったことへの認識を考えると、日本の社会は米国人と異なり、戦争捕虜となった同胞に自分を重ね合わせることは決してできなかった。日本人の戦争捕虜は、多少なりとも気にかけてもらえたとしても、称賛や同情ではなく、嘲笑の対象であったろう。むしろ、戦場の勇者と戦争犠牲者の両方の役割を最後まで果たす人物像とはすなわち、1945年の正式な降伏後も、自分の能力の及ぶ限り任務を遂行し続けた兵士である¹³。

第二次世界大戦中にどれだけの数の日本兵が残留兵になったのかは知りようがない。連合軍が島を「蛙飛び」したために援軍が近づけず、そのまま見捨てられたり取り残されたりした日本兵が何万人もいた。また、降伏が伝えられた時点で大部分の日本兵がそれに従い、最終的には本国に送還されたが、その一方で、自分の任務は戦闘を継続することであると解釈したか、または、いっさいの連絡が届かないほど孤立していた者も多かった。小野田寛郎は¹⁴、おそらく最もよく知られた残留日本兵であろうが、当初は、十数人の仲間と共に、降伏後も任務を遂行し続けた。彼が所属した部隊の大部分は、1947年に地元当局に投降したが、3人だけが小野田と共に残った。その内の1人は3年後に投降し、もう1人は、捜索隊によって1954年に殺害された。小野田と共に最後まで投降を拒否し続けた小塚金七は、小野田が説得されて投降する2年前の1972年に警察との銃撃戦で死亡した。太平洋の各地にちらばって、戦時中の大部分の期間にわたり、深刻な物資不足に直面していた日本兵があまりに多いため、傷を負ったり発病したところに栄養不良に追い打ちをかけられて命を落とした兵士がどれくらいの人数になるのか、そして、自分が考え得る最善の方法で任務を遂行するために、ジャングルに逃れた兵士がどれくらいなのかを知ることはおそらく不可能であろう。

終戦直後、残留日本兵は、日本で特に注目されることはなかった。大部分の国民は、もっと差し迫った問題を抱え、生き延びるために、そして生活を立て直すために毎日奮闘せざるを得なかった。さらに重要なのは、戦争がもたらした惨状が過去への憎悪につながったことであった。戦時と戦時に関連するすべてが一般市民の意識から消えた、というのは言い過ぎかもしれないが、少なくとも一般的な話題にのぼることはなくなった。戦時中は、愛する家族にすら行方についてはっきりした知らせがないのが当たり前であったため、残留日本兵と家族の絆は問題にならなかった。行方不明の兵士は、ペレ

¹² James Clavell, *King Rat* (New York: Dell, 1962).

¹³ 残留日本兵に関する総合的な歴史書はない。これに関する注目すべき論文の1つが、Beatrice Trefalt, *Japanese Army Stragglers and Memories of the War in Japan, 1950-75* (London: Routledge Curzon, 2003) である。

¹⁴ Hiroo Onoda, *No Surrender: My Thirty-Year War* (Tokyo: Kodansha, 1974).

リューの要塞の中で火炎放射器の餌食になったかもしれないし、硫黄島の洞穴に生き埋めになったのかもしれない。そこでは、元兵士の遺骨や遺品の回収と身元特定が未だ終わっていないほどである。従って、太平洋のかなたの島でまだ「任務」についている残留日本兵の身元や人数に関する情報を疑う理由は何もなかった。

残留日本兵が発見されたり、投降したりして初めて、日本の国民はそうした元日本兵の存在に気付き始めた。最初、帰還した元日本兵が浴びた注目は、お祭りオタクやそのほかの風変わりな人間に対するものと似ていた。1950年代半ば以降発見された残留日本兵への関心は、幾分か大きくなった。降伏後10年間も太平洋戦争を戦っていた兵士が何人かいたことを考えたとき、戦争がもたらした荒廃から立ち上がろうとしていた社会に同情が沸き起こった。発見されたり、隠れ場所から出てきたりした残留日本兵はそれぞれ、第二次世界大戦で戦った最後の兵士とみなされて、先の敗戦で味わった自らの苦しみを数年前に克服した国民から相応の同情が寄せられた¹⁵。

1960年代には、残留日本兵はほとんど姿を見せなかった。戦争終結から丸25年を経た1965年に、ソロモン諸島のベララベラ島で、ある家の庭の周りをうろうろしている1人の兵隊が見つけれ、とうとう投降するよう説得された。数年後には、沖縄でさらに2人の元日本兵が見つかり、日本本土に送還された。最も有名な残留日本兵達が発見されたのが、1970年代であった。1972年にグアム島で見つかった横井庄一は、地下壕を住まいとし、ジャングルの川で捕まえたウナギなどを食べて生き延びた。1974年にはさらに2人の元日本兵が見つかった。フィリピンのルバング島にいた小野田寛郎は、しばしば畑から作物を盗むことがあったので、以前からその存在はばれていたが、ついには投降するよう説得された。その数カ月後、インドネシアのモロタイ島で中村輝夫が発見された。残留日本兵であることがわかっている最後の人物がナカヒラ・フミオで、戦闘が終了してから実に35年が過ぎた1980年に、フィリピンのミンドロ島の未開地で発見された。そのほかにも、太平洋のあちらこちらから元日本兵を見かけたという報告がもたらされてきたが、一番最近の情報は2005年のものであった。しかし、噂を裏付けるような、信頼に足る証拠があったのは1つもなかったし、中には作り話であることが判明した情報も2、3あった。

そうした残留日本兵に対する日本の待遇は、1960年以前と以後とでは著しく異なった。後から帰還した元日本兵達は、マスコミで大きく取り扱われたが、それは好奇的としてではなく、国を愛する真の英雄として報じられた。何十年も忠実に任務を果たしながら、「恥ずかしながら、生き永らえて帰って参りました」と謙虚に挨拶したこと

¹⁵たとえば Ito Masashi, *The Emperor's Last Soldiers* (New York: Coward, 1967) は、1959年にニューギニアで発見された2人の日本兵に関する書籍である。「最後の」という言葉は、1950年以前に発見された場合であっても、残留日本兵について述べた記事もしくは書籍の題名によく使われている。

で、横井は大いに称賛された。召集を受けるまで仕立屋で丁稚奉公をしていた横井は、終戦後長らく近代社会と隔絶して生きてきたが、しかし、帰還から2年後には参議院議員に立候補したものの落選した。にもかかわらず、テレビタレントとなり、贈り物と縁談が殺到した。小野田寛郎の場合も、帰還したときは同じように騒がれた。成田空港に降り立った小野田を数千人の人々が出迎え、彼の回想録は全国的なベストセラーとなった¹⁶。

これらの元日本兵達がもてはやされた理由の1つには、原始的な条件の下で生き延びたという話が注目を集めたからであり、エレクトロニクスに囲まれ、グローバリゼーションの進展と資本主義経済の下で大量消費の時代を生きる日本人達は、多大な関心を寄せたのであった。特に横井は、原始的な自然の中で生き延びる方法についての著作を出版し、またテレビのワイドショーに出演しては樹皮から衣服を作る話をして視聴者を引きつけた。しかしこれだけでは、日本に帰還した残留日本兵がなぜ幅広い好評を得たのかを説明しきれない。母国の人々に慕われたのは、むしろ、彼らが昔気質な愛国心と任務への忠誠を尊んだからである。そのほかにも、たとえば、1970年の作家三島由紀夫の割腹自殺など、日本の市民を帝国主義時代の価値観と対峙させる事件が起こっていたが、そこにさらに残留日本兵が帰還したことで、日本の市民は改めて、古くさい軍国主義に対する非難の声を上げた。しかし大部分の日本人にとってこのような帰還兵達は、経済的な発展を遂げながらますます物質主義的な社会になりつつあった戦後日本の変革の中で失われた、精神的な高貴さと忠誠心を象徴していた。現在グアムの土産物店の軒先で横井の肖像画をプリントしたTシャツが売られているという状況がいかに皮肉なものであるのか、それを購入する若い日本人観光客は恐らく気付いていない。しかし、そのような商品が販売されているということは、現代の日本人の間でまだ、そうした残留日本兵が敬愛されていることを示している。

今日の日本で見られるそうした残留日本兵への信望や敬慕は、単に、少し前の時代へのノスタルジアや過ぎ去った世代の犠牲的精神とか実績に対する尊敬だけを表している訳ではない。第二次世界大戦の際に国家が果たした役割および国家が取った行動と切っても切り離せない関係がある。この大戦中、日本の政府はマスコミを統制し、日本と敵国の活動の実態を等しくゆがめて国民に伝えた。日本の平凡な多くの市民が、戦後の戦争犯罪者に対する裁判によってようやく、自分達の名の下で行われた行為が何であったのかを知るようになった。この裁判のお陰で、軍隊と軍国主義を憎悪する市民感情に拍車がかかり、これが新しい憲法に反映された。新憲法では、少なくとも帝国の時代に存在したような形態の軍隊は違憲とされた。このため公の場で戦争について論じることが

¹⁶ Hiroo Onoda, *No Surrender*.

タブー視されるようになり、日本は、社会全体で戦争の記憶を葬りさることになる。大多数の日本人にとって、戦争のイメージとして不気味な焼夷弾と、1945年に投下された原子爆弾の犠牲となった哀れな民間人が浸透していた。日本は、戦争の惨禍を被った。日本は今や、平和というものが、盛況な国際貿易のお陰で生活水準が飛躍的に高まったことを始めとする数々の恩恵をもたらしてくれることを知った。そのために日本は、軍国主義と戦争と、そして不快な過去につながる痕跡を遠ざけた。

しかし、人間の過去を拒絶したりまたは隠したりすることは心理的には難しく、感情的には満足できるものではないとしか言いようがない。残留日本兵に対する上述したような反応は、無意識のうちに起こった嘘偽りのないものであった。なぜなら、自分の任務を全うし「武士道」を尊んだ、わずか数人の帰還兵達は、負の痕跡と共に記憶から消されてしまった過去のなつかしい思い出のすべてを象徴していたからだった。飢えと恐怖と孤独と、そしてまったく見当もつかないほどの欠乏状態にもかかわらず、発見されるまでの長年の間ずっと自分の任務を遂行してきた孤独な兵士は、戦時中の日本を具現しているのではない（少なくともその時代の日本の全てを具現しているのではない）。むしろ、この兵士は、かつての自分達の姿はこうであったと現代の日本人が信じたい日本を具現しているのである。小野田寛郎がすべての残留日本兵の中で最も称賛されるようになった理由は、彼の階級がほかの帰還兵よりも高かったとか、使命を帯びていたからではない。小野田はジャングルの中で生き延びただけでなく、それが天皇と国家のために自分にできる最善のことだと信じてひたすら戦争を遂行し続けたからである。

そして小野田は、あたかも（マーガレット・ミッチェルの小説『風と共に去りぬ』に登場する）アシュレー・ウィルクスが南部連合国の過去にとってそうであったように、過ぎ去った古き良き時代の日本の理想化されたイメージとなった。残留日本兵達が戦後も無垢な民間人を殺めたという事実——小野田とその同胞は、1945年以降あちこちで騒動を起こし、約30人ほどのフィリピン人を殺害した——は、ちょうどマーガレット・ミッチェルの著名な小説の中で、アシュレー・ウィルクスがクー・クラックス・クランの活動に関与していたというおぞましい事実が上流階級の高貴な行為として粉飾されたように、なつかしい過去を形成する際に都合良く見過ごされた。

辛抱強い米国人捕虜とストイックな残留日本兵のイメージには、記憶を形成する仕掛けであるばかりでなくそのほかに、何か共通するものがある。どちらも平凡な市民であるという点に焦点が当てられているのである。アジアの非人間的な捕虜収容所で弱っていく兵士と、大義のためにひたすら自分1人の戦争を遂行する現代のサムライはどちらも、危機に瀕した国家のために戦えと言われて召集されただけの平凡な市民であった。彼らに自分の姿を重ねることが20世紀後半から21世紀初頭にかけてだんだんと強くなっていった。戦時の唯一の生存者が、1940年代にはまだ幼かった男性と女性だけに

なっていたからだ。年若い、あるいは他界していく祖父達や退職者は、かつて陸軍の兵や海軍の有能な水兵、あるいは工場労働者であった。つまり、太平洋戦争によって当時からその後も最も多大な影響を受けた平凡な市民達であった。

米国人と日本人が捕虜あるいは残留兵をここ 20 年の間に強く意識するようになったことによって太平洋戦争の記憶が形成された訳ではない。そのような記憶形成のプロセスは、かなり以前から始まったものであるからだ。むしろ、民主主義の時代の市民が、自国の政治や活動に対する所有権を認める際に経験しなければならないプロセスであった。基本的な価値観と信念を再確認できるようなやり方で過去を形成することは、米国人であること、または日本人であることのまぎれもない一部分である。

民族の哲学を正しく理解したいと思うなら、その民族が戦争でどのような行動を取るのかを研究すべきである。民族の心理を理解したいと思えば、その民族の戦争の記憶を研究すべきである。米国人捕虜と残留日本兵について研究することにより、日本人も米国人も、相互の理解を深めることができるかもしれない。そのような相互理解が 70 年前にできていたら、太平洋戦争をそもそも回避することができたかもしれない、というのは皮肉なことである。